

生きがいと寿命に関する意識調査

——某大学一年生の場合——

藤 沢 邦 彦・栗 原 淳

The Consciousness Examinations About Worthy Life And Length of Life

——Case of a University freshmen——

Kunihiko FUJISAWA, Atsushi KURIHARA

We examined consciousness regarding worthy life and length of life in order to prove the necessity of worthy life for longevity.

Nine hundred and seventy one University freshmen were surveyed on their consciousness regarding worthy life and their own longevity expected and desired.

1) The mean life expectancy forecasted by freshmen was 64.5 (male) and 67.3 (female), and the one desired was 71.7 (male) and 69.5 (female).

These were lower than the life expectancy of Japanese.

2) Most of them were likely to be satisfied by superficial desire for worthy life, and few by essential worthy life.

3) There were found no significant relationships between worthy life and the life expectancies forecasted and desired.

4) It could be concluded that University freshmen should be educated on understanding of worthy life that may contribute to the longevity.

Key words: Consciousness examination, Worthy life, Length of life

I 緒 言

大学生の「死」に対する意識調査において、予測寿命及び望む寿命ともわが国の平均寿命をかなり下回っている¹⁾。寿命は長ければ長いほど良いと決めてかかることに疑問を感じる者も少なくないが、充実した人生であるならば長いにこしたことはないと考える者も少なくない。充実した人生すなわち、生きがいのある人生こそ長寿志向の条件といえるであろう。もし、大学生が現在生きがいのある生活をおくり、そして将来に生きがいのある人生が期待できれば、彼等の志向する寿命も

長くなるのではなからうか。

われわれはこの点に着目し、大学生の生きがいと寿命に関する意識調査を実施し、検討を行なったところ、大学生の生きがいと志向する寿命の間に若干の興味ある結果が得られたので報告する。

なお、人それぞれが持っているであろう生きがいについて、その善し悪しを決めたり、妥当性を論ずることは困難なことである。つまり、何を生きがいとするかはまったく個人の価値判断によって決まるものであり、社会正義にでも反さないかぎり他人に評価できるものではないからであ

る。しかし、人々の生きがいをなんらかの視点に基づいて分析し、それぞれの特性を検討することは可能であろう。今までにも生きがいについての調査はよく行なわれており²⁾、青年期にある者や大学生の生きがいについても、いくつか調査結果が報告されている^{3)~6)}。また、返田が生きがいという言葉について「いろいろな調査・研究までが生きがいの本質構造を十分解明しないままに、好みに応じてあいまいに使っている」と指摘しているような点⁷⁾を配慮して、“情熱の対象”を調査⁸⁾したり、“夢中になれるもの”を調査している⁹⁾例もある。本研究では、大学生達が好みに応じて勝手に使っている生きがいをそのまま素直にとらえて検討を試みた。

II 研究方法

大学生の生きがいと寿命に対する意識の実態を把握するため、次のような調査を行なった。

1. 調査対象：都内某私立大学文科系第1学年 971名 (男子797名, 女子174名)
2. 調査時期：昭和62年5月
3. 調査方法：当該大学の保健理論の講義時間を利用し、記名で質問紙による調査を行なった。
4. 調査項目：以下の4問に自由に答えさせた。
 - 1) 現在の生きがいは何か？
 - 2) 将来、何を生きがいとしたいか？
 - 3) 自分の予測寿命は何才か？
 - 4) 自分の望む寿命は何才か？

“生きがい”という語が大学生にどのように理解されて回答されるか確かではなかったが、この語を簡単に定義して示すことも困難であり、あえて学生自身の生きがい観にもとづいて自由に記述させる方法をとった。

なお、予測寿命及び望む寿命については、でたらめな回答を防ぐため、わが国の平均寿命について事前に簡単に解説した。

5. 分析の視点：大学生が記述した生きがいは多様であり、彼等のあらゆるニーズの充足がすべて生きがいとしてあげられているのではないかと思われるほどである。やりがいのあること(やりたいこと、やるべきこと)の実現、持ちがいのあること(もちたいもの、もつべきもの)の実現、ありがたいのあること(ありがたい姿、あるべき姿)の実現、等がすべて生きがいとしてあげられたこと自体が、大学生の生きがい観とし

て受けとめられるであろう。そこで、あげられた生きがいを次の三つの分類方法によって分類し、その実態を検討した。なお、回答形式が不統一のため、それぞれの分類法に適合しない回答については、そのつど除外し集計した。

- 1) 神谷 (Kamiya) による分類¹⁰⁾ (以下K分類とする)

- ①生存充実感への欲求を満たすもの
- ②変化と成長への欲求を満たすもの
- ③未来性へ欲求を満たすもの
- ④反響への欲求を満たすもの
- ⑤自由への欲求を満たすもの
- ⑥自己実現への欲求を満たすもの
- ⑦意味への欲求を満たすもの

この分類法は、一般に生きがい調査によく用いられるものである¹¹⁾。

- 2) 行動類型 (Behavior) による分類 (以下B分類とする)

- ①生理的行動型
- ②拘束的行動型
- ③自由行動型

この分類は、生活の中の行動欲求の充足を生きがいとしてあげたものについて分類するものであり、所有欲求のある対象物を伴ってあげられたものも少なくない。

- 3) 明確さ (Definition) による分類 (以下D分類とする)

- ①明確である
- ②やや不明確である
- ③不明確である
- ④意味不明である
- ⑤生きがいなし

この分類は“大学一年生のレベルで生きがいがまだ明確にできない者がいるのではないか”という仮説のもとに独自にもうけたものである。また、明確性は記述された現象、対象物における明確性に加えて、その意味するところのこの明確さも含めて分類した。

III 結果と考察

調査の結果を、寿命に対する意識、生きがいの実態、生きがいと寿命の関連の三つの視点から考察した。

1. 寿命に対する意識の実態

寿命に対する意識を予測寿命と望む寿命からみ

たところ、次のような結果を得た。

1) 大学生の予測寿命

男子学生が予測した寿命は64.5才 (S.D. 16.38), 女子学生は67.3才 (S.D. 15.67)であった。これは昭和60年度のわが国の平均寿命, 男子73.57才, 女子79.00才¹²⁾よりも短命であり, 同じく昭和60年度の20才の者に余命を加えた年齢, 男子74.78才, 女子79.90才よりもやはり男子10.3才, 女子12.6才も短命予測である。しかし, 男女を比較すると, 有意な差は見られなかったが女子の方がやや長命であることは, わが国の実態と同じである。

大学生の短命予測の原因は, 社会的要因を考えての予測なのか, あるいは自分自身の生活状況等の個人的要因に基づくのか定かでないが, 事前にわが国の平均寿命を理解していたにもかかわらずこのような予測をしたことは, 彼等自身の生きる力が弱いことを認めているといえよう。

2) 大学生の望む寿命

男子学生の望む寿命は71.7才 (S.D. 16.14), 女子学生は69.5才 (S.D. 17.63)であった。これは予測寿命と同様, 昭和60年度のわが国の平均寿命を男女とも下回っている。しかし, 予測寿命と比較すると, 男子7.2才 (0.1%水準で有意差あり), 女子2.2才 (有意差なし) 長命志向である。また, 有意差はないが女子の望む寿命が男子よりもやや短かいことがうかがえる。

男子において望む寿命が予測寿命を上回ったことは, 可能であれば長生きしたいという希望をもっていることを示しているといえよう。しかし, 女子の場合は男子に比べてその希望はあまり強くないといえる。

なお, 本調査における大学生の予測寿命及び望む寿命の実態は, われわれの先行研究¹⁾と同じ傾向を示しており, 大学生の一般的傾向とみられる。

3) 予測寿命と望む寿命の関係

表1は予測寿命と望む寿命の関係を示している。寿命区分を表に示すように, 69才以下の短命型, 70~79才の平均型, 80才以上の長寿型に分けると, 男女ともに, 予測寿命も望む寿命も短命型の者が多い (男子の22.3%, 女子の22.2%) といえる。

阪阪は「平均寿命が世界一という統計は, 日本にとって最大のスキャンダルだ」といってわが国の長寿をなげいている¹³⁾が, 大学生にもそのような長寿否定の風潮があるのだろうか。長寿は古く

表1 予測寿命と望む寿命の関係 (%)

		予 測 寿 命			
		短 命	平均的	長 寿	
望 む 寿 命	短 命	男	22.3	15.0	13.8
		女	22.2	10.2	12.0
	平均的	男	6.6	12.5	10.5
		女	8.4	11.4	9.6
	長 寿	男	3.2	4.8	11.4
		女	7.2	6.6	12.6

(N=男子754, 女子167)

から人々の願いであり, 百歳まで現役で頑張ろうという「百現会」や百歳まで働こうという「百働会」が高齢者によってつくられていたり¹⁴⁾, 長寿のための啓蒙書も少なくない^{15)~18)}。そしてこれら長寿・長命を目指す活動において, 共通して強調されていることは, 生きがいをもつことであり, 生きがいこそ長寿の秘訣といっている。また, 癌を宣告された精神科医の西川は「いつだったか妻からあなたは死に急いでいる, と言われたことがある。果してそうだろうか。(略)私は決して死に急いではいない。一日でもよけいに生きたいと思っている」とも言っている¹⁹⁾。

大学生男子の中には, 「男らしく恰好よく死にたい」といった考えの者も少なくなく, 女子にも「老醜をさらしたくない」といった考えの者も少なくない²⁾。それでいて一方で「ほどほどに長生きしたい」と言っているように, 見えない老いさきに対して, ほんねとたてまえが混在しているのが若い大学生の現状であろう。

2. 生きがいの実態

大学生の現在の生きがいと将来の生きがいを三つの分類法によって検討したところ次のような結果が得られた。

1) K分類による実態

表2は, 現在の生きがいと将来の生きがいについて, 男女別にK分類による分類を行なったものである。記述されたある1つの生きがいが複数の欲求を満たしていると判断された場合は重複して集計した。またK分類で処理できない「生きがいなし」「わからない」等の回答をした者は除外した。

現在の生きがいについてみると, 男女とも, 「生存充実感への欲求を満たすもの」(男子53.4%, 女

表2 現在、及び将来の生きがいに対するK分類(%)
重複分類

K分類		1	2	3	4	5	6	7
現在の生きがい	男	46.2	51.7	5.5	24.8	14.5	14.5	4.8
	女	53.4	41.6	4.3	16.7	16.1	13.1	6.6
将来の生きがい	男	34.9	17.4	12.8	36.9	4.0	55.7	20.8
	女	42.4	17.7	12.9	24.7	5.5	45.5	12.1

(K分類の該当者数
将来の生きがい：男668，女149)

1. 生存充実感への欲求を満たすもの
2. 変化と成長への欲求を満たすもの
3. 未来性への欲求を満たすもの
4. 反響への欲求を満たすもの
5. 自由への欲求を満たすもの
6. 自己実現への欲求を満たすもの
7. 意味への欲求を満たすもの

子46.2%)と「変化と成長への欲求を満たすもの」(男子41.6%，女子51.7%)が多い。「生存充実感への欲求を満たすもの」として分類された生きがいは、生理的に満たされていること(食欲・睡眠・性欲)、物質的に満たされていること(車・オーディオ・パソコン)、運動・スポーツをすること、経済的に安定していること、自然の中にいること等である。また、「変化と成長への欲求を満たすもの」として分類された生きがいは、新しい経験をすること、自立すること、学問・勉強をすること、人と対話すること、冒険をすること等である。

次に将来の生きがいについてみると、やはり男女同様の傾向があり、「生存充実感への欲求を満たすもの」(男子42.4%，女子34.9%)と、「反響への欲求を満たすもの」(男子54.7%，女子36.9%)と、「自己実現への欲求を満たすもの」(男子45.5%，女子55.7%)が多い。「反響への欲求を満たすもの」として分類された生きがいは、尊敬されること、愛情をもとめること、友人をつくること、家庭を大切にすること、社会へ貢献すること等である。また、「自己実現への欲求を満たすもの」として分類された生きがいは、納得のいく仕事につくこと、一生懸命生きること、趣味と仕事の両立、趣味と勉強の両立、家庭と仕事の両立等である。

以上の他に、あまり多くあげられなかったが、「未来性への欲求を満たすもの」として分類されたのは、子どもに期待すること、将来に期待する

こと、生活目標をもつこと等であり、「自由への欲求を満たすもの」として分類されたのは、学生生活そのもの、遊ぶこと、思うままに生きること等であり、「意味への欲求を満たすもの」として分類されたのは、人生について考えること、真実を求めること、使命感をもつこと等である。

以上のようなK分類による生きがいの実態をみると、現在の生きがいは現実的な生活充実と成長過程における充実であり、将来の生きがいは生活充実と自己実現と精神的落ち着きにあるといえよう。吉田等の調査においても、青年は現在は「生活享受型」、将来は「自己実現型」と分析している²⁰⁾のと似ている。

2) B分類による実態

表3はB分類による結果である。現在の生きがいにおいては、男女とも、「自由行動型」が最も多く(男子74.2%，女子66.7%)、将来の生きがいは「拘束型」が多くなっている。(男子67.5%，女子68.5%)。

「自由行動型」として分類した生きがいは、運動・スポーツをする、旅行・ドライブをする、友達とつきあう、アルバイトをする、学生生活を楽しむ等である。また、「拘束型」として分類した生きがいは、仕事をする、結婚をする、子どもを育てる、学問をする、仕事と家庭を両立させる等である。「生理的行動型」として分類した生きがいは食べる、寝る、酒を飲む等である。

以上のようなB分類による生きがいの実態をみ

表3 現在、及び将来の生きがいに対するB分類(%)

B分類		自由	拘束	生理的
		現在の生きがい	男 74.2	22.8
女	66.7	27.6	5.7	
将来の生きがい	男 30.8	67.5	1.7	
女	21.3	68.5	10.1	

B分類の該当者数
 現在の生きがい：男403,女87
 将来の生きがい：男360,女89

ると、現在の生きがいは、もちたいものを持ち、やりたいことをやるような大学生活を個人的に楽しむことであり、将来の生きがいは社会的にやるべきことをやることであり、と考えている者が多いといえる。かつて、大学一年生の生活を“花の一年、あせりの二年、あきらめの三年、悟りの四年”と自ら論じた学生がいた²¹⁾が、中野は「とにかく、惨澹たる光景がぼくの眼前にある。なすすべもなく、暗澹たる気分にさいなまれている。三無主義五無主義といわれた世代が、今、大学に在学している」ともいっている²²⁾。また、最近カレッジ症候群やスチューデントアパシーなどの言葉も使われ、いわゆる大学生ダメ論が続出している状況と関連がある。

内多はこのような状況について「追求する欲求の本体と本質が何であるかについての十分な検討と、そしてそれが真に永つづきのする幸福を約束するものであるかの見とおしをもたないままにそ

れを追って駆け出した若者は、やがて幻滅を感じるようになり、しらけのなかに落ちこんでいった」と分析している²³⁾。一方、将来の生きがいについては、かれらの目標であり、希望であると考えられるが、果して今のしらけた生活から抜け出せるか、あるいは、社会に十分な受け皿があるか、懸念されることである。

3) D分類による実態

表4はD分類による結果である。D分類は大学生が自分のやっていること、やろうとしていることについて、生きがいという視点からどれだけ明確にできたかをみたものであるが、男女とも、また、現在の生きがい、将来の生きがいともに、「やや不明確」である者が最も多い。そして、「不明確」な者、「意味不明」の者、「記述できない」者を合わせると男女とも約20%の者が、現在の生きがいも将来の生きがいも、はっきり記述できない状況にあるといえる。また、「明確」な者は女子よりも男子の方に多い傾向もみられる。

やや不明確なものとして分類された生きがいは仕事をする、スポーツをする、勉強をする、旅行をする、友達とつき合う等である。また、明確な答として分類された生きがいは子どもの成長を見届けること、弁護士になって活躍する、結婚して家庭を守る、社長になって金持になる、生涯テニスすること等である。

当初、現代の生きがいが「明確」であり、将来の生きがいが「やや不明確」である者が多いという結果を予想していたが、実際は現在の生きがいとして記述された生きがいも現象や対象物だけが明確であって、その意味するところがはっきりしないものが多く、予想と異なる結果となった。これは生きがいは本質の意味まで考慮したい、考慮

表4 現在、及び将来の生きがいに対するD分類(%)

D分類		明	確	やや不明確	不明確	意味不明	なし・無記入
		現在の生きがい	男 24.0		53.3	15.0	1.2
女	11.5		68.4	9.9	1.5	8.6	
将来の生きがい	男 24.6		53.3	16.2	0.6	5.4	
女	9.7		66.4	12.1	1.6	10.2	

(N=男754, 女167)

すべきであるというわれわれの生きがい観と、大学一年生の実感的な生きがい観の相違によるものであろう。

生きがいの実態を三つの分類によって分析的にみたが、現在の生きがいも、将来の生きがいも「生存充実感への欲求を満たすもの」といった、生活的、物質的な生きがいが多くあげられ、「未来性への欲求を満たすもの」や「意味への欲求を満たすもの」といった精神的・本質的な生きがいが少ないことがわかった。これは、受験戦争から抜け出し、やっと入学した大学がマンモス大学（当該大学はいわゆるマンモス大学である）で、個人の存在が無視され、しらけてしまったか、途ほうにくれた結果ではないだろうか。短絡的な、目先の欲求の充足はエスカレートするものであり、やがて、本質的な生きがいが見失われてしまうことになるのではなからうか。

3. 生きがいと寿命に対する意識の関連

現在の生きがいと将来の生きがいそれぞれについて、三分類（K、B、D分類）ごとに予測寿命及び望む寿命を男女別に検討した。

1) K分類による現在の生きがいと寿命

現在の生きがいをK分類によって分類し、予測寿命と望む寿命との関連性を表5により検討した。その結果、男子では「未来性への欲求を満たす」生きがいを除く、すべての分類項目において予測寿命と望む寿命の間に0.1%水準で有意差が認められ、望む寿命を長く回答していた。女子では「自己実現への欲求を満たす」生きがいにおいてのみ予測寿命と望む寿命の間に1%水準で有意差が認められ、男子と同様に望む寿命を長く回答していた。

また、予測寿命を分類項目で比較したところ、男女とも有為な差は認められなかった。望む寿命についても同様であった。

2) B分類による現在の生きがいと寿命

現在の生きがいをB分類によって分類し、予測寿命と望む寿命との関連性を表6により検討した。その結果、男子では「自由型」及び「拘束型」の生きがいにおいて、予測寿命と望む寿命の間に0.1%水準で有意差が認められ、望む寿命を長く回答していた。女子では特に差が見られなかった。

表5 K分類における現在の生きがいと寿命の関係（歳）
重複分類

K分類		重複分類							
		1	2	3	4	5	6	7	
予測 寿命	男	平均	64.2	64.9	61.0	68.1	66.0	63.3	57.7
		SD	16.17	15.82	13.54	14.8	15.5	16.22	21.23
		n	362	282	29	113	109	89	45
	女	平均	66.8	68.1	64.4	66.9	64.4	60.1	68.0
		SD	15.43	15.96	16.57	14.09	17.23	14.36	13.9
		n	67	75	8	36	21	21	7
望む 寿命	男	平均	71.2	74.2	64.8	74.4	75.4	71.5	70.1
		SD	15.23	15.04	16.95	12.6	13.25	14.81	15.72
		n	362	282	29	113	109	89	45
	女	平均	68.7	71.3	72.9	70.5	69.6	72.1	53.1
		SD	17.87	16.8	25.39	18.02	15.02	16.19	16.46
		n	67	75	8	36	21	21	7

（ K分類の該当者数
現在の生きがい：男678，女145 ）

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 生存充実感への欲求を満たすもの | 5. 自由への欲求を満たすもの |
| 2. 変化と成長への欲求を満たすもの | 6. 自己実現への欲求を満たすもの |
| 3. 未来性への欲求を満たすもの | 7. 意味への欲求を満たすもの |
| 4. 反響への欲求を満たすもの | |

表6 B分類における現在の生きがいと寿命の関係(歳)

		B分類		自 由	拘 束	生理的
		平均	SD			
予 測 寿 命	男	平均	64.1	64.2	69.8	
		SD	16.42	16.96	10.85	
		n	299	92	12	
	女	平均	66.0	69.6	68.2	
		SD	17.77	18.61	8.9	
		n	58	24	5	
望 む 寿 命	男	平均	71.2	74.3	69.4	
		SD	15.16	16.51	9.32	
		n	299	92	12	
	女	平均	68.6	69.2	62.6	
		SD	18.43	18.03	27.54	
		n	58	24	5	

(B分類の該当者数
現在の生きがい：男403, 女87)

また、予測寿命を分類項目で比較したところ、男女とも有為な差は認められなかった。望む寿命についても同様であった。

3) D分類による現在の生きがいと寿命

現在の生きがいをD分類によって分類し、予測

寿命と望む寿命との関連性を表7により検討した。その結果、男子では「明確」及び「やや不明確」な生きがいにおいて、予測寿命と望む寿命の間に0.1%水準で、「不明確」な生きがいにおいて1%水準で有意差が認められ、望む寿命を長く回答していた。女子では特に差がなかった。

また、予測寿命を分類項目で比較したところ、男女とも有為な差は認められなかった。望む寿命についても同様であった。

4) K分類による将来の生きがいと寿命

将来の生きがいをK分類によって分類し、予測寿命と望む寿命との関連性を表8により検討した。その結果、男子では「自由への欲求を満たす」生きがいを除くすべての分類項目において、予測寿命と望む寿命の間に0.1%水準で有意差が認められ、望む寿命を長く回答していた。女子では特に差がなかった。

また、予測寿命を分類項目で比較したところ、男女とも有為な差は認められなかった。望む寿命についても同様であった。

5) B分類による将来の生きがいと寿命

将来の生きがいをB分類によって分類し、予測寿命と望む寿命との関連性を表9により検討した。その結果、男子では「自由型」及び「拘束型」の生きがいにおいて、予測寿命と望む寿命の間にそれぞれ1%水準、0.1%水準で有意差が認めら

表7 D分類における現在の生きがいと寿命の関係(歳)

		D分類		明 確	やや不明確	不 明 確	意味不明	なし・無記入
		平均	SD					
予 測 寿 命	男	平均	63.0	64.8	63.8	62.1	65.5	
		SD	16.45	16.05	18.97	7.93	16.93	
		n	87	516	75	11	65	
	女	平均	64.7	69.1	65.0	67.0	67.8	
		SD	17.87	15.08	15.23	18.39	12.95	
		n	40	89	25	2	11	
望 む 寿 命	男	平均	69.2	72.6	70.4	76.7	68.7	
		SD	16.72	15.19	17.65	18.78	19.63	
		n	87	516	75	11	65	
	女	平均	69.2	70.4	69.4	80.0	61.2	
		SD	18.62	16.56	20.87	7.07	15.47	
		n	40	89	25	2	11	

(D分類の該当者数：男754, 女167)

表8 K分類における将来の生きがいと寿命の関係(歳)

重複分類

K分類		重複分類							
		1	2	3	4	5	6	7	
予測 寿命	男	平均	64.6	63.8	64.4	64.3	66.2	66.3	62.3
		SD	16.17	16.35	15.85	17.3	18.49	15.72	17.97
		n	283	118	86	165	37	304	81
望む 寿命	女	平均	64.9	71.0	68.8	69.2	79.5	67.4	64.0
		SD	17.78	15.18	12.57	11.74	9.77	14.57	18.07
		n	52	26	19	55	6	83	12
望む 寿命	男	平均	71.5	69.1	71.8	72.2	72.2	73.6	72.6
		SD	15.81	16.06	16.34	15.17	13.23	15.38	17.00
		n	283	118	86	165	37	304	81
望む 寿命	女	平均	69.9	65.5	69.1	72.4	73.8	70.3	61.4
		SD	20.34	18.37	14.31	15.44	16.92	16.19	24.01
		n	52	26	19	55	6	83	12

(K分類の該当者数
将来の生きがい：男668, 女149)

1. 生存充実感への欲求を満たすもの
2. 変化と成長への欲求を満たすもの
3. 未来性への欲求を満たすもの
4. 反響への欲求を満たすもの
5. 自由への欲求を満たすもの
6. 自己実現の欲求を満たすもの
7. 意味への欲求を満たすもの

表9 B分類における将来の生きがいと寿命の関係(歳)

B分類		B分類			
		自由	拘束	生理的	
予測 寿命	男	平均	63.2	65.0	64.8
		SD	17.32	15.93	13.67
		n	111	243	6
望む 寿命	女	平均	68.7	65.3	69.3
		SD	15.51	14.94	12.56
		n	19	61	9
望む 寿命	男	平均	69.4	73.4	68.8
		SD	18.34	15.22	15.66
		n	111	243	6
望む 寿命	女	平均	66.4	71.3	62.9
		SD	22.96	16.26	14.98
		n	19	61	9

(B分類の該当者数
将来の生きがい：男360, 女89)

れ、望む寿命を長く回答していた。女子では「拘束型」の生きがいにおいて5%水準で有意差があり、望む寿命を長く回答していた。

また、予測寿命を分類項目で比較したところ、男女とも有為な差は認められなかった。望む寿命についても同様であった。

6) D分類による将来の生きがいと寿命

将来の生きがいをD分類によって分類し、予測寿命と望む寿命との関連性を表10により検討した。その結果、男子では「明確」、「やや不明確」及び「不明確」な生きがいの分類項目において、予測寿命と望む寿命の間にそれぞれ0.1%水準で有意差が認められ、望む寿命を長く回答していた。女子では特に差がなかった。

また、予測寿命を分類項目で比較したところ、男女とも有為な差は認められなかった。望む寿命についても同様であった。

以上のことから、大学生の生きがいと彼らの予測寿命及び望む寿命の間に特定の関連を見出すことはできなかった。このことは、大学生のあげた生きがいをそのまま分類し、予測寿命や望む寿命

表10 D分類における将来の生きがいと寿命の関係(歳)

D分類		D分類					
		明 確	やや不明確	不明確	意味不明	なし・無記入	
予 測 寿 命	男	平均	61.8	64.9	63.0	57.9	68.1
		SD	17.15	16.3	17.36	13.56	14.79
		n	73	501	91	12	77
望 む 寿 命	女	平均	68.2	66.7	67.8	73.0	67.6
		SD	14.75	15.57	16.19	—	21.85
		n	41	89	27	1	9
予 測 寿 命	男	平均	70.9	71.9	71.4	72.1	71.6
		SD	16.81	15.71	17.96	21.91	15.40
		n	73	501	91	12	77
望 む 寿 命	女	平均	70.7	69.8	70.4	50.0	59.8
		SD	19.77	17.02	15.79	—	18.25
		n	41	89	27	1	9

(N=男754, 女167)

と分析的につきあわせて検討することに無理があったことを示唆しているかもしれないが、生きがいと志向寿命の関連を否定しているわけではない。

すでに述べたように大学生のあげた生きがいは、現在では短絡的な欲求の充足が多く、本質的な欲求の充足は少ない傾向にあった。そして彼らを取りまく状況を考えると、次のようなことがいえよう。

①大学生は確かな自分の価値や社会的地位は得ておらず、換言すればまだ何も失うものを持っていない。

②本質的な生きがいが未確立であることや、就職難等の社会的要因から、将来に可能性が見出せない。

③物質的、感覚的、身体的に恵まれ、生命が脅かされるような危機感がない。

この①～③の状態が揃うことによって、自ら奮起して長生きしなければならないとは考えず、ほどほどに生きるとか、起死回生をねらって一発勝負にしようとする姿勢ができてしまうのではなかろうか。すなわち、大学生の短命志向あるいは長寿否定の原因に短絡的な生存充実感への欲求の安易な充足(大学生自身は生きがいと思っている)があると考えられる。

佐藤は「青春の時代から己の人生の在りようを

常々考え、生きがいの何たるかを発見するように知恵を磨いていきたい。そうなれば、いわば他力本願的な、あるいは浮草のような頼りない生きがいではなく、真に主体的なそして固有な生きがいを我がものとするのが可能になるのである」と言っている²⁴⁾が、最近の大学生に生きがいについて真剣に考えさせる機会がどれだけあるのだろうか。生命尊重を基本理念とする大学保健教育において、生きるに値する世の中、生きるに値する自分づくりを目指した生きがい教育を行なうことができれば有効であろう。それには当然のことながら、大学保健教育担当者の資質向上が不可欠である。

IV 結 論

某大学一年生に生きがいと予測寿命、望む寿命について調査を行なったところ、次のようなことが明らかになった。

1. 予測寿命、望む寿命ともわが国の平均寿命を下回っていた。
2. 現在の生きがいとして、生活的、物質的、感覚的な「生存充実感への欲求の充足」をあげている者が多かった。
3. 将来の生きがいとして、「生存充実感への欲求の充足」と「自己実現への欲求の充足」をあげている者が多かった。

4. 予測寿命、望む寿命と現在の生きがい、将来の生きがいの関連を分析的に検討した結果、生きがいの内容によっては、予測寿命、望む寿命とに関連がみられた。
5. 短命志向や長寿否定の原因として、生存充実感への欲求の安易な充足が考えられる。
今後の対策として、大学一年生に対する保健教育において生命尊重の一環として長寿に結びつくような本質的な生きがいについての教育を行なうことも有効であろう。

参 考 文 献

- 1) 藤沢邦彦・栗原淳：某大学学生の「死」に対する意識，筑波大学体育科学系紀要第19巻，1987。
- 2) 余暇開発センター編：日本人の生きがい構造，日本人のレジャー構造，ダイヤモンド社，pp.45～58，1974
- 3) 依田新編：現代青年の悩み，大日本図書，pp.183，1968
- 4) 山科三郎：人間の尊さとはなにか，青木書店，pp.168—170，1983
- 5) 権藤与志夫：子どもの生きがい，生きがいの探求，九州大学出版会，pp.185～197，1983
- 6) 尾形憲他：現代の学生像，法政第9巻第4号，法政大学，pp.18，1982
- 7) 返田健：青年の世界4，生きがいの探求，大日本図書，pp.20，1981
- 8) 松原治郎：日本青年の意識構造，弘文堂，974
- 9) 浅井正昭：若者の行動とレジャー，青年期—危機と独創の時代—，芸林書房，1972
- 10) 神谷美恵子：生きがいについて，みすず書房，pp.89～91，1980
- 11) 松田義幸他：新装置基礎調査(1)，余暇開発センター，1974
- 12) 厚生省：国民衛生の動向，厚生統計協会，pp.79，1985
- 13) 保阪正康：「人命尊重」新聞ヨタ記事合戦，新潮4，5第6巻11号，新潮社，pp.52，1987
- 14) 富永咲子他：百歳までもさりげなく，日本工業新聞社，pp.18—22，1982
- 15) 日高寿三郎：長生き読本，雪華社，1964
- 16) 岸田軒造：百まで生きる健康設計，学修社，1966
- 17) 佐上清：健康長寿への挑戦，不味堂新書，1979
- 18) 浜口陽吉：生命延長の体育，黎明書房，1973
- 19) 西川喜作：輝やけ我が命の日々よ，新潮社，pp.160，1982
- 20) 吉田昇他：現代青年の意識と行動，NHKブックス，pp.165～167，1978
- 21) 朝日新聞（投書），1978・6・13
- 22) 中野収：文明の中の若者たち，現代のエスプリ，No.213，至文堂，pp.20，1985
- 23) 内多毅：大学生，鷹書房，pp.159，1979
- 24) 佐藤元：生きがいと教育，新宿書房，pp.76，1987